

佳作

『源氏物語論』 清水 好子著

文学部 文学科 3 年 関口 諒祐

「いづれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり」。高校生以上なら誰しも習った源氏物語の冒頭であるが、古文の授業でこの文章に何か特別な記憶を持っている人はいないだろう。私は品詞分解と和訳をして、すぐ次の文に移った記憶しかない。

著者の清水好子氏は「いづれの御時にか」の言葉だけで 60 頁も考察している。物語の始まりが、なぜ「むかし」や「今はむかし」ではなく「いづれの御時にか」なのか。そこに清水氏は源氏物語の作者の意図があると考えた。

当時の様々な日記の表記の方法を比べ、男の政治上の事務的な必要ごとである年号年代の記載が日記には必要なく、そうすることで日記はただの記録性、日常性を脱し、物語性、文学的一般性を持ったと述べる。では「いづれの御時にか」と時代をぼかすことも歴史性から脱しているのかといえそうではない。日記に文学性を持たせたのとは逆に、源氏物語はその物語に歴史性を持たせたのである。

かげろふ日記の「いかなるあしたにかありけん」や藤原長能集の「いかなるをりにか」、「年もおぼえ侍らず」などの疑問や不定な表現から、人々がその背後の事実を知っているからこそあえて曖昧な表現をすることを清水氏は見つけた。紫式部はこの書き方を知っていて、この物語は事実だと匂わそうとしたのだと清水氏は考える。

この本は、「いづれの御時にか」だけに限らず、いわゆる源氏物語第一部における歴史との関りを考察したものである。物語、フィクションは歴史から離れて普遍性を持つものだが、源氏物語は歴史性を持たせたというのは興味深い。清水氏は歴史を補うものの風格を作品に与えようとしたと述べるが、このことに関しては清水氏の助けはいらない。螢の巻では光源氏が「日本紀などはただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しくくはしきことはあらめ」と言ったことが書かれている。日本紀(歴史書)などは一面的で、これら(物語)にこそ真理を含んでいて詳細なことが書かれていると述べるのである。

これらのことを考えると、物語はただ作者の頭の中だけで作られるものではなく、当時の文化や歴史に大いに影響されていることが分かる。そして高校の授業のように古文を現代語訳したり、それを読むだけでは決して源氏物語を読んだことにはならない。高校三年間理系で全く文学に興味がなかった私は、大学に入り源氏物語を古文のまま読み、清水氏の論文を読み、再び源氏物語に戻って読み、物語にこそ「道々しくくはしきこと」が書かれていると納得した。近頃、文学は不要などという言葉をよく耳にするが、いかななものかと思うのである。